

第4章

第3期保幼小連携・接続推進事業の 成果と課題

第1章から第3章では、市内小学校での「連携・接続」の取組状況や「連携・接続」に関わる研修会の内容、小学校を核に隣接する就学前施設を一つのブロックにした3つのブロックの「連携・接続」に関する実践研究等の取組を紹介してきました。

第4章では、第3期「保幼小連携・接続推進事業」の成果と課題、そして就学前施設や小学校で「連携・接続」を進める際にどのようなことを大切にすればよいのかという視点で、第3期（令和4・5年度）の取組を通して見えてきたことをまとめました。第1期、第2期の「保幼小連携・接続推進事業 取組まとめ」の“第4章「連携・接続」で大切にしたいこと”と合わせてご覧ください。

第4章 第3期保幼小連携・接続推進事業の成果と課題

(1) 主な成果

○第1期・第2期の「連携・接続」の取組状況等調査、スタートカリキュラム作成状況調査

- ・保幼小連携・接続研究に取り組んだ効果として、「教職員同士の交流」が活発になり、「就学する幼児についての情報共有」や「小学校の先生が就学前施設で保育参観」することを、第1期・第2期に研究に取り組んだ全ての小学校が現在も継続していることが分かった。
- ・スタートカリキュラムの作成をしている小学校が、「令和元年度調査」と比較すると18校から48校となり、30校がこの間に増加していることが分かった。

○保幼小連携・接続研修

参加者のアンケートから

(就学前施設)

- ・研修に参加して、「連携と接続」と言うと難しく考えてしまうが、1つ1つできることから進めていくことで連携を深めていき、子どもたちが小学校に安心して進学できるようにしていく必要があると強く感じた。
- ・「できることから始めればいい」という言葉や、Teams やオンライン、DVD でも活用できるということが分かり、何か始めてみようという気が湧いてきた。
- ・交流会では、他所園の先生方のご意見を知れて参考になった。同じ区内の校長先生と「できることから連携を取っていこう」という具体的な話があり嬉しく思った。「やれるかも」「できそう」と思える内容で勇気が湧いてきました。
- ・改めて、遊びの中の学びの大切さに気付かされた。どれだけ子どもが遊びに夢中になり学べているのか、自分の保育を見直すきっかけとなった。

(小学校・義務教育学校・支援学校)

- ・保幼小の接続と関連づけた教育課程のあり様が大切だと感じた。スタートカリキュラムについては、小学校における弾力的なカリキュラム開発がなければ段差を越えられない状況が生まれることになる。生活科は意義深いと言える。今後は、保幼小の先生方が互いの授業を参観し合い、学びが深まる機会をもちたい。
- ・他校種、公私、立場の違う方との交流は、とても有意義であった。学びの部分が多く、自校に戻って共有できる部分が多くあった。講演の内容も、これからの保育から小学校のつながりを知ることができた。事例検証は自校でもやってみたい。
- ・職員同士で、お互いに育てたい姿について考える研修を取り入れたいと感じた。18歳まで一貫したカリキュラムを目指し、できるところから進めていきたいと思う。
- ・保幼小連携がどのようにされているのか知る機会となった。保幼小の具体的な連携の話は聞くことができたが、支援学校との連携の話は出ず、課題であると感じた。支援を必要とする子どもは増加しており、支援学校に入学する子どもも増えているため、連携は必要であると感じた。また、インクルーシブを進めていくためには、障がいのある人のことを知る、関わっておくことが大切であり、支援学校との連携も進んでほしいと感じた。

○保幼小連携・接続研究

- ・施設の保育内容や教育内容を見学したことで、各施設の違いや共通していると感じたことを各施設の教職員間で話し合い、共通理解・認識ができた。
- ・今まで知らなかったがゆえに、「1年生を早く小学生らしくしなくては」と思い接していたが、実際の子どもの育ちに合わせて、緩やかに以前の生活から変化させていくことの大切さが分かるなど、教職員の意識が変わった。
- ・1年間連携した後の1年生は入学後、スムーズに学校になじめており、成果が表れていることが分かった。連携を通して今まで漠然としていたイメージが具体化され、不安が解消されたことが大きいようだった。
- ・ブロックでの合同授業・保育では、就学前施設の子どもたちの遊び（無自覚な学び）が、小学校での自覚的な学びへとつながる、発達の学びの連続性となっていることを共通認識することができた。
- ・子ども同士の交流では、就学前施設の職員は成長の見通し、小学校職員は成長の振り返りをする、良い機会となり意義のある交流となった。
- ・就学前の子どもたちが日々の生活・遊びの中で主体的に活動することが、就学してからの豊かな学びへとつながっている。そのためにも子どもたちを取り巻く大人たちが「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を理解し、連携しながら幼児期から児童期の発達を見通し、関わることの大切さをこの取組で感じることができた。
- ・ブロックの子どもたちの生活を基に作成した架け橋プログラムは、架け橋期に各就学前施設が工夫して行っている環境構成や遊びが見える化したものとなった。
- ・子どもたち同士、そして大人同士、子どもと大人がこの2年間の取組を通して、『お互いを知り、共に学び、つながる』ための基盤をつくることができた。
- ・就学前施設同士も公立・私立の垣根を超え、日常的に連絡を取り合い、積極的に情報交換や交流活動ができるようになった。
- ・スタートカリキュラムを協働作成する中で、就学前施設の教員は小学校の教育活動やその内容を知り、小学校の教員は就学前に子どもがどのような教育活動を行ってきたのか等、互いに学び合う機会になった。スタートカリキュラムを活用したことで、1年生が一人ひとりのペースに合わせ、安心して小学校生活をスタートでき、その後の学校生活にも良い影響を与えることが分かった。保幼小連携・接続の必要性と、その大切さをあらためて実感することができた。

(2) 主な課題

- ・研究指定を受けたブロックの施設からは「この2年間で学んだこと、得たことを基礎にして、今後もお互いが無理をせず当たり前のように連携していけるように、年間のスケジュールを組んで継続していきたい」「作成した架け橋プログラムが、幼児期から小学校への円滑な接続となるよう、次年度からは小学校のカリキュラムに交流活動を入れ込むこととし、子どもたち一人ひとりの豊かな育ちへとつながっていくよう、継続して取り組んでいきたい」「共通の願いと目標を掲げて2年間の研究に取り組んできたことで、4校園所の関わりやつながりの基盤を

つくることができた。それを今後いかに継続していくことができるのかが重要である」等の、今後も継続していく思いをたくさん得られた。研修や研究に参加された施設において、どのような取組の進展があったかについては、把握できていないのが第2期からの継続した課題である。

- ・小学校においては、スタートカリキュラム作成が課題であるので、スタートカリキュラム作成等に関わる研修や情報の発信についても、大阪市小学校教育研究会と連携しながら取り組む必要がある。
- ・各施設での「連携・接続」の取組に活用していただけるように、今後も「保幼小連携・接続研究」に継続して取り組みその成果を発信するとともに、研修会での「連携・接続」の重要性や意義についての情報発信に取り組む。



保幼小連携・接続推進事業 第3期（令和4・5年度）取組まとめ

令和6年5月 発行

編集・発行者 大阪市こども青少年局 大阪市保育・幼児教育センター

〒535-0031 大阪市旭区高殿 6-14-6

TEL 06-6952-0173 FAX 06-6952-0178